

第二章 光源氏の物語 大宮に玉鬘の事を語る

[第一段 源氏、三条宮を訪問]

今はまして(今回は特に、ご病氣見舞いという事で)、忍びやかにふるまひたまへど(殿は控え目に振舞いなさったが)、行幸に劣らず*よそほしく(帝の年末の狩行列に劣らない麗々しきで)、いよいよ光をのみ添へたまふ御容貌などの(ますます光り輝くばかりのお顔立ちなどが)、この世に見えぬ心地して(この世のものとも思えない素晴らしきで)、めづらしう見たてまつりたまふには(有難く拝し奉りなさいますと)、いとど御心地の悩ましきも(重くなっていた御病状も)、取り捨てらるる心地して(取り払われる気分がして)、起きゐたまへり(大宮は床から起き出して座していらっしやいました)。御脇息にかかりて(肘掛に寄りかかって)、弱げなれど(弱弱しい声ながら)、ものなどいとよく聞こえたまふ(話題に沿って良くお話し申しなさいます)。 *「装し」は<[形シク] 美しくてりっぱである。荘厳である。>と大辞泉にある。それにしても、「みゆきにおとらず」と殿を帝に準えるなどという畏れ多い語り口には違和感を禁じ得ない。注には、「今はまして」を<太政大臣となった現在。「行幸に劣らず」に係る。>と説明してあるが、源氏殿の太政大臣就任は4年前の33歳の夏くらいの梅壺女御の中宮立後に伴う出世人事だったのであり、その件を「今は」に持ち出すのは意味不明の注釈だ。此処の文脈での「今」は<大宮への病氣見舞い>という事情を言っているようにしか見えない。また、読者こそは、帝が源氏殿の実子だと承知しているが、此処で作者が急に読者目線に立って物を言うべき場面とも思えない。では、大宮と帝と源氏殿との間に何か特別な関係性があったのだろうか。いや、思い当たらない。「今」や「忍びやか」の言い回しに、とくに年末の大原野行幸に掛かる洒落言葉があるのだろうか。いや、思い当たらない。で、此処で「みゆき」を持ち出す作者の意図は、やはり全く分からない。その意味では難文だ。ただ、此処の文というよりは、第一章の第四段と第五段の間に脱稿が強く疑われるので、もしかすると、その脱稿文に殿と帝を準える下敷きや病氣見舞いと鷹狩りとを対比させるような逸話や言い回しの妙などが記されていたのかもしれない。そういう事にしないと収まらないほど、この文の解は見当たらない。

「*けしうはおはしまさざりけるを(御加減がひどく悪くはいらっしゃらないのを)、*なにがしの朝臣の心惑はして(倅の中将が気を動転させて)、おどろおどろしう嘆ききこえさすめれば(宮の体調を重体のように嘆き話し申し致しますようですので)、いかやうにもものせさせたまふにかとなむ(どうなさっていらっしゃるのかと)、おぼつかながりきこえさせつる(ご心配申し上げ続けておりました)。 *「けしうある」は「異しう在る」で<異様で在る→普通ではない→病状が悪い>となり、「けしうあらざる」は<悪くは無い>という言い方になるらしい。ただ、「異しからず」は<「けしうある」状態>を酷評する為に否定形で強調した言い方で<普通以下で非常に悪い>という意味のようだ。 *「何某のあそん」については、注に<夕霧をいう。『集成』は「実名で言ったのをおぼめかしてこういう。「朝臣」は五位以上の人に対する敬称。ここでは、大宮に対する敬意から、その愛孫についてやや改まった言い方をする」と注す。>とある。詰まりは息子の事を、こういう呼び方にしている訳だ。そして、この文の意図は「思ったよりも御元気で安心しました」という慰めの言葉、なのだろう。が、言葉通りに受け止めると、中將が必要以上に大袈裟に重病だと言っていた、という非難めいた言い方のようにも見えて、こうした身内を貶めて謙遜する言い回しは今でも使うものの、これでは<思ったより軽くて良かった>というよりは<大した事も無いのに心配させるな>というように聞こえてしまって、その語感の違いに少し戸惑う。

内裏などにも(御所へも)、ことなるついでなき限りは参らず(特別の用事が無い限りは参内致さず)、朝廷に仕ふる人ともなくて(おほやけにつかふるひとともなくて、公職にある者に相応しからず)籠もりはべれば(家に籠もっておりますので)、よろづ*うひうひしう(何事にも気後れいたして)、*よだけくなりにてはべり(煩わしくなっていました)。 *「うひうひし」は<物馴れしない>だが、殆んど<面倒で気乗りしない>ような語感だ。太政大臣という権威の超絶性からくる余裕だろうか。嫌味なほどの浮世離れ振りだ。 *「よだけし」は「弥猛し」で<普通以上に仰々しい>だが、だから<大儀だ、億劫だ>ということにもなるらしい。正に<面倒くさい>と言っている訳だ。

齢など(年齢では)、これよりまさる人(私以上の人が)、*腰堪へぬまで屈まりありく例(腰が曲がっても忠勤に励む中国の賢人の例が)、昔も今もはべめれど(昔から在るようですが)、*あやしくおれおれしき本性に(私は卑しくも愚かしい性分に)、添ふ*もの憂さになむはべるべき(加えて怠け者のようです) *「こしたへむまでかがまりありくためし」は注に<『集成』は「金章腰に勝へざるに、僂僕して君門に入る」(白氏文集、秦中吟、不致仕)を指摘。『完訳』は「四皓の故事のように、老齢をおして朝廷に仕えた賢人たちをさす」と注す。>とある。 *「あやし」は<変で見苦しい>で、卑下した言い方だろうから<卑しい>とする。「おれおれし」は<愚かしい>とある。 *「もの憂さ」は<ものぐさ、怠け者>なのだろう。

など聞こえたまふ(などと殿は大宮に申しなさいます)。

「年の積もりの悩みと思うたまへつつ(年老いた為の衰えかと存じまして)、月ごろになりぬるを(この数ヶ月不調でしたが)、今年となりては(年が変わってからは)、頼み少なきやうにおぼえはべれば(先も長くなさそうに感じておりました)、今一度(もう一度)、かく見たてまつりきこえさすることもなくてやと(貴方とこのように御会い出来る事が無いかも知れないと)、心細く思ひたまへつるを(心細く存じておりましたが)、今日こそ(今日御会いできて)、またすこし延びぬる心地しはべれ(また少し寿命が延びる気分がして、)。今は惜しみとむべきほどにもはべらず(今は命を惜しみ求めようとは思いません)。

*さべき人びとにも立ち後れ(共に生きるべき夫や娘にも先立たれ)、世の末に残りとまれる類ひを(年老いて生き延びている人びとを)、人の上にて(他人事として傍目に見る分には)、いと心づきなしと見はべりしかば(とても見苦しいと思っていたので、我が身を振り返ればそろそろ自分も)、*出で立ちいそぎをなむ(あの世への旅立ちの支度というものを)、思ひもよほされはべるに(考えようかともなります今の時分に)、この中将の(この中将が)、いとあはれにあやしきまで思ひあつかひ(とても親身に大袈裟なほど世話を焼いて)、心を騒がいたまふ見はべるになむ(心を砕きくださるのを見るに付け)、さまさまにかけとめられて(その逐一の心配りに引き止められて)、今まで長びきはべる(今まで生き延びてきました) *「さべき人びと」は注に<親しい肉親をいう。大宮にとっては、夫の太政大臣や娘の葵の上に先立たれたことをさす。>とある。「さべき」は「然あるべき」で<然るべき、それ相応な>という言い方らしいが、「それ相応」の「それ」とは<共に人生を歩むこと>に違いない。 *「いでたちいそぎ」は注に<あの世への旅立ちの支度。>とある。

と(と大宮は)、ただ泣きに泣きて、御声のわななくも、*をこがましけれど(わざとらしいほどだったが)、*さることどもなれば(本心からの事どもなので)、いとあはれなり(同情を誘います)。 *「をこがまし」は現代語では<差し出がましい、出しゃ張った>の意味で使われ、その<身の程をわきまえない愚か

しき>の<愚かしき>が「をこ(痴、烏滸)」の原義に適うとのように古語辞典に説明があり、古語では<馬鹿げている>という意味が強いようだ。しかし大宮に「馬鹿げている」という表現は不適切なので、せいぜい「どうかしている」と思えるほど取り乱して「いたのだろうか、その印象としては「わざとらしいほど」だったかと思う。 *「然る事」は<妥当なこと、尤もなこと>で、何が妥当と思えるのかと言えば、それらが大宮の<本心からのものだということ>を傍目にも理解できた、ということだ。

[第二段 源氏と大宮との対話]

御物語ども(御二人のお話で)、昔今のとり集め聞こえたまふついでに(昔のことから今のことまでいろいろとお語りなされる内に)、

「内の大臣は(藤原殿は)、*日隔てず参りたまふことしげからむを(日を置かずに御見舞いに参りなされることが多いでしょうから)、かかるついでに対面のあらば(このような時に御会いできれば)、いかにうれしからむ(どんなに嬉しい事でしょう)。いかで聞こえ知らせむと思ふことのはべるを(ぜひお知らせ申し上げたいことが御座いますが)、さるべきついでなくては(こうした折りでもない)、*対面もありがたければ(御会いすることも出来ませんので)、おぼつかなくてなむ(気懸かりになっています)」 *「日隔てず」については、注に<『完訳』は「内大臣の訪問が稀なのを知りつつ言う。大宮の不満を誘発し、彼女の心を取りつけて内大臣との対面の機会を作ろうとする」と注す。>とある。確かに、例の二の姫と源氏中将との恋仲の発覚以来は内大臣は三条邸に疎遠で、野分巻第一章第三段には台風の見舞いでさえ「内の大殿の御けはひは、なかなかすこし疎くぞありける」と記されていた。が、源氏殿がこういう言い方をするには、内大臣に対する姫の裳着の際の腰結役を打診したのに、大宮の病状を理由に内大臣が断ってきたことを受けてはいるのだろう。 *「対面もありがたければ」は注に<太政大臣の源氏と内大臣では、身分柄なかなかたやすく会う機会もむずかしい。>とある。が、「身分柄」で会えないワケでは無いだろう。藤原殿は近江君の出来の悪さもあってか、源氏殿の対の姫の評判の高さを妬んで、また引け目を感じてか、会いたがらない。そこで源氏殿は搦め手を労した。藤原殿が大宮の不調を話題に持ち出したこともあるが、源氏殿のこの言い方は、大宮に改めて一族の要の立場を認めて、それはつまり計算高く彼女を持ち上げて、敢えてその大宮に仲介の労を願って、藤原殿への対の姫の素性の打ち明けを、身内事として円満に収めようという事の運びの意図を示すもの、なのだろう。

と聞こえたまふ(と殿は宮にお話なさいます)。

「公事のしげきにや(公務が忙しいのか)、私の心ざしの深からぬにや(個人的に私への思い遣りが深くないのか)、さしもとぶらひものしはべらず(彼の者は然程見舞いにも参りません)。のたまはすべからむことは(御用の向きは)、何さまのことにかは(何でしょうか)。

中将の恨めしげに*思はれたることもはべるを(中将が姫の引き離しを恨めしく思ってしまったことも在りますが)、『*初めのことには知らねど(二人が恋仲になることの良し悪しはともかく)、今は*けに聞きにくくもてなすにつけて(今は変に耳障りな文句を付けて強引に引き裂いてみても)、立ちそめにし名の(立ってしまった噂は)、取り返さるるものにもあらず(取り返しのつくものでもなく)、をこがましきやうに(馬鹿げた遣り方のように)、かへりては世人も言ひ漏らすなるを(却って世間ではひそひそと悪く陰口を言い触らすものなのだから)』などものしはべれば(などと意見しましたが)、立てたるところ(一度言い出したことは)、昔よりいと解けがたき

人の本性にて(昔から先ず曲げない気質の人なので)、心得ずなむ見たまふる(承知しないだろうと思っています)」 *「思はる」の「る」は帰結の助動詞で<その性向からして其のままでは自然に然うなってしまう>という意味合いだろうから、「思はれたること」は<く思ってしまったこと>とする。 *「初めのことは知らねど」を<馴れ初めは承知していなかったが>と読んで、大宮が二人の仲を積極的に取り持ったのでは無い、という弁明と解することも出来そうで、それが注の<『集成』は「これより「言ひ漏らすなるを」まで、かつて内大臣に向って言った趣。二人のことは大宮の承認があつてのことではないと、改めて強調する」。>という意味なのだろう。しかし、大宮は二の姫と源氏中将との恋愛を本質的には認めている。ただ、確かに婚儀の許諾は女側の父である藤原殿に実権が有るので、宮も息子の機嫌を取るような場面は有り得る。それでも、今しがた大宮は源氏殿から一族の要としての立場を持ち上げられたばかりであり、此处で言い訳がましいことを言う必要は無い、に違いない。噂を打ち消すのは無駄だという文筋からしても、この「初めのこと」は<馴れ初め>というよりは<恋仲になつてしまうことの是非>かと思う。 *「けに」は「異に」で<変に、普通以上に>と古語辞典にある。

と(と大宮は)、この中将の御ことと思してのたまへば(例の中将の件かとお思いになって仰れば)、うち笑ひたまひて(殿はお笑いになって)、

「いふかひなきに(反対しても仕方の無いことと)、許し捨てたまふこともやと聞きはべりて(藤原殿が二人の仲を許しておしまいなさることもありそうに聞き及びまして)、ここにさへなむ(この私までさえ)かすめ申すやうありしかど(少し口添え致しましたが)、いと厳しう諫めたまふよしを見はべりし後(たいそう厳しく付き合いを咎めなさる意向を見知りましてからは)、何に*さまで言をもまぜはべりけむと(どうしてそれほどに口出しをしてしまったものかと)、人悪う悔い思ふ*たまへてなむ(体裁の悪い事と後悔したもので御座います)。 *「さまで」は「かすめ申すやうありし」ことと注にあり、注には更にその中身が<『完訳』は「源氏の内大臣への口添え。これは物語には見えない」と注す。>とあって、結局は具体的に源氏殿が藤原殿側に何を言ったのかは分からない。ただ藤原殿は当時、源氏若君の位階の低さを理由に二の姫から遠ざけた、という事だったかと思うので、源氏殿は低い身分の者とも親交を得る意義などの子息への教育方針を藤原殿に説明して、その時点での位階の低さにこだわらないように申し入れたのかも知れない。尤も藤原殿は、娘の弘徽殿女御が梅壺中宮に后位を出し抜かれて、源氏殿への対抗心から二の姫と源氏若君との仲を裂いたのであり、表向きの理由など実際は意味が無かったし、むしろ源氏殿の能書きなど殊更に小賢しく思ったのではないだろうか。そして、そのことは源氏殿も源氏若中將も、恐らく大宮も分かっていたようにも思う。 *この「たまふ」は聞き手への丁寧語。また注には、「なむ」の中止に<下に「はべる」などの語句が省略。余意・余情表現。>とある。

よろづのことにつけて(何事にも)、清めといふことはべれば(整理整頓して始末の区切りを付ける清めということがありますので)、いかがは(藤原殿はこの不始末をどうにか)、さもとり返し(体裁を付けて)すすいたまはざらむとは思うたまへながら(汚名を濯ぎなさる事だろうとは存じますが)、かう口惜しき濁りの末に(このように残念にも濁ってしまった後では)、*待ちとり深う*住むべき(期待して何年と待ち暮らしても、期待したような深くまで澄んだ)水こそ出で来がたかべい世なれ(水などは出て来そうもない世の中のようなのです)。何ごとにつけても(どんなことでも)、*末になれば(後になるほど)、落ちゆくけぢめこそやすくはべめれ(悪い結末に行き易くなるのです)。いとほしう聞きたまふる(お気の毒に存じます)」 *「待ち取る」は<成果を期する>で「水」に掛かる。が、如何にも技巧的な言い回しで何か下敷きでも在りそうだが、何の注釈も無い。是が若し丸々と作者の発案だとしたら、態と過ぎて無骨な印象の筆致だ。 *「住む」は「澄む」との掛詞。「深し」は<多い>という

意味があるので「深く住む」は「長年暮らす」。*「末になれば」は「後になるほど」と言い換えたが、これは「口惜しき濁りの末に」の「すゑ」を「後」と言い換えたツケが回った下手な読み方だ。本文では「濁りの末」が下敷きになって、「末になれば」が「末世には」という洒落言葉になって、文意としては「(いずれにしても)世も末だと(悪くなる一方だ)」という軽妙な言い回しをしているのだろう。しかし作者も、この洒脱さを言いたい余りに、つい「待ちとり深く住むべき」などと少し無理をした嫌いがある、などと私は思う。

など申したまうて(などと申しなさって)、

[第三段 源氏、大宮に玉鬘を語る]

「さるは(その話と言うのは)、かの知りたまふべき人をなむ(かの人がお世話なさるべき或る人を)、*思ひまがふることはべりて(隠し子には有りがちな、分かり難い込み入った事情がありまして)、*不意に尋ね取りてはべるを(思いがけず私の娘と見知って面倒を見ておりますが)、その折は(当初は)、さるひがわざとも*明かしはべらずありしかば(それが間違いともはつきり致しませんでした)、あながちにことの心を尋ね返さふこともはべらで(特に事の真相を調べ返すことも致しません)、たださるものの種の少なきを(ただそうした子種の少なきに)、かことにても(娘というのが嘘だとしても)、何かはと思ふたまへ許して(別に構わないと存じて大目に見て)、*をさをさ睦びも見はべらずして(然程は親身な世話もせず)、*年月はべりつるを(数年経ちましたが)、いかでか聞こしめしけむ(何処でお聞き及びあそばしたのか)、内裏に仰せらるるやうなむある(帝から其の者に御所仕えの御打診が御座いました)。*「思ひ紛ふ」は「思い違いをする」だが、「まがふ」の自動詞の活用は四段で「思い違いをした(こと)」という意味での連体形は「思ひまがふ(こと)」であり、此処の「思ひまがふる(こと)」は他動詞の連体形だから「思い違いをさせる)ややこしい(こと)」という意味だろう。*「不意に」は「それと意図しないで」だろうが、「たづねとる」を「捜し出して迎える」と読むと、「捜す」という行為が無自覚というのは語意が破綻する。そこで、渋谷訳文にあるように「不意に」を「思いがけず」という偶然性と解せば、「尋ぬ」が「見知る、事情を聞きつける」で、「取る」を「家に引き取る→面倒を見る」と読めそうだ。*「明かしはべらず」については、注に「『完訳』は「当人がそうしたまぢがいだとも打ち明けてくれませんでしたので」「玉鬘やその女房らが。源氏自身の誤認でないとして、責任転嫁」と注す。「はべり」は玉鬘の行為に対して用いた丁寧語。>とある。良く分からないが、特に「責任転嫁」の言い方と取らなくても、「ありし」を全体の状態の説明と見ても良いのではないか。今の場面の段階では、全体に曖昧な言い方のような気がする。*「をさをさ睦びも見はべらず」は注に「『完訳』は「親身な世話をせず。玉鬘と愛人関係などではないことを弁明」。>とある。この言い方は、確かに態と親しくない印象付けを意図しているようだ。後ろめたさの裏返し、なのだろう。*「としつき」については、注に「玉鬘が源氏に引き取られて二年たつ。>とある。

*尚侍(ないしのかみ、女官長として)、宮仕へする人なくては(総監督の職責を司る者がいなくては)、かの所のまつりごとしどけなく(催事の進行を担う内侍所の規律が保てず)、女官なども(によかんなども、実際に立ち働く女官たちも)公事を仕うまつるに(おほやけごとをつかうまつるに、式次第を仕えるのに)、たづきなく(どの様式に則るのかの判断が付かず)、こと乱るるやうになむありけるを(現場が雑然としかねない実情なので)、ただ今(今現在)、主上にさぶらふ古老の(帝側近の古老の)*典侍二人(すけふたり、女官次長の二名や)、またさるべき人びと(その他の数名の候補者が)、さまざまに*申さするを(それぞれに任官願いを申し入れて来ていますが)、はかばかしう*選ばせたまはむ尋ねに(帝が適任者をお選びあそばす審査で)、類ふべき人なむな

き(該当すべきという者がいないのです)。*「尚侍」については、注にく以下「選せたまはむ」まで、帝の詞を引用。間接話法が混じる。定員二名。うち一名は朧月夜がなっている。もう一名が欠員。>とある。朧月夜とは藤原右家の六姫だろうが、退官して朱雀院に住んでいるのではないのだろうか。朱雀院が今上帝に譲位したのは8年前にもなる。後で、また六姫の登場場面でもあるのだろうか。意外だ。*「典侍(ないしのすけ、すけ)」については、注にく典侍は定員四名。うち、二人が尚侍への任官を申請している。>とある。*「まうさす」は動詞「申す」の未然形に謙譲の助動詞「す」が付いたものらしく<申し上げる>で、それに受身の助動詞「る」が人事大臣たる源氏殿から語られるので<申し入れが来ている>という言い方、なのだろう。*「選ばせたまはむ」の最上敬語表現は帝に対してのものだろうが、それに続く「尋ねに類ふべき人なむなき(審査で該当者がいない)」という実際の選考担当当事者としての報告口調からは、大臣の自負や責任を感じるよりも、帝の権威を笠に着た官僚の厚顔無礼ぶりを私などは感じてしまう。つまりは、是が身分社会の限界なのだろう。どんなに神懸かった厳かな権威も、結局は、当たり前だが生物上で同じ人類の、同質組織の構成員同士として他者と大差ないある個人が、しかしながらその組織の運営上の役割分担に於いては強圧を持って他者を恐怖心で支配するという構造でしかない、という資源の有限性とその利用技術水準を前にする現実だ。いやしかし、それでも強権によって大土木工事や大きな寺社建築を残してきた歴史の成果を全否定する心算は無い。ただ、当時に比して飛躍的に高性能の産業生産性を獲得した現代社会の問題意識としては、身分社会とそれを裏付ける宗教概念の限界を認識して、組織構造の区切りと権利と責任の理論立てをしっかりと付けなければ未来が展望できない、と思う。

なほ(やはり)、家高う(家格が高く)、人のおぼえ軽からで(人柄の評判も悪くなく)、*家のいとなみたてたらぬ人なむ(家の生計を負担しない人というのが)、いにしへよりなり来にける(昔からその職に就いています)。*「家の営み立てたらぬ人」については、注にく自家の生活を顧みなくてもよい恵まれた人。裏返して言えば、世間には自家の生活のために宮仕えしている者がいるということである。>とある。生活に追われていれば、落ち付いて客観的な判断を下すのが難しそうな気はするし、直接の利害に関わったり仕事が雑になることもあるのかも知れない。しかし、生活に余裕があっても自家や味方勢力の損得に振り回される者は多そうだし、裕福な教養人に正義があるとも限らない、というか苦汁を知らない者は既に分類整理された情報にしか触れていないので、目黒の秋刀魚よろしく却って視野が狭い。それでも此処の表現は一般的な客観性の担保を期待する施政者の姿勢に見えて面白い指摘だし、当時の選考者の談が今に伝わったものとして見れば、この文の史料価値も高まりそうだ。

したたかにかしこきかたの選びにては(堅実で聡明な人の選考に於いては)、その人ならでも(そういう人でなくても)、年月の労になりのぼる類ひあれど(長年の実績によって昇進する例は在りますが)、しか類ふべきもなしとならば(そうした該当者も無しとなると)、おほかたのおぼえをだに選らせたまはむとなむ(世間一般の評判の高い者からでもお選びあそばさうかということで)、うちうちに*仰せられたりしを(内々に帝が当家にいる姫に御所仕えを仰せになりましたが)、*似げなきこととしも(私が面倒を見て来た当家の姫とは彼の人のお姫君ですので、その姫を尚侍に就かせ申すことが、必ずしも不相応な申し出でだとは)、何かは*思ひたまはむ(どうして彼の藤原大臣もお思いになるでしょうか)。*「仰せられたりし」は帝の言葉なので、先の「いかでか聞こしめしけむ、内裏に仰せらるる」のことだろう。*「似げなきこととしも」とは実に心憎い言い回し、なのだろう。というのも、藤原殿は、源氏殿に張り合っただけの出来の悪い近江の君を引き取ったくらいだから、当然に六条院の対の姫の評判の高さは知っている。大宮も、その噂ぐらいは耳にしてください。それが実は、藤原殿の妹の娘だと言う。しかも、尚侍就任は家の名誉である。慶事である。思いがけず、源氏殿から藤原殿へ御目出度い話が持ち込まれた、という段取りだ。此処まで上首尾の話なら、少くも仕合せの合わない事があっても、全ては尚侍就任が打

ち消してくれるだろう、というのが源氏殿の計算のようだ。内侍司は後宮女官だが、奥向きの話を表向きに取り次ぐという職務の性質上、その責任者たる尚侍には向う表の諸侯に対する押しの強さは求められただろうし、ということは奥向きの女官とは言え名目上の王家血筋よりは有力貴家の子女が据えられたのであり、それがお手付きともなれば性処理係りの召人とは違って御部屋様になるのであり、実際の場面でも女御・更衣に次ぐ妃であったことは既に朱雀院の藤家六姫の例でも語られている。*「思ひたまはむ」については、注に<主語は内大臣。反語表現。きつと賛成してくれよう、の意。>とある。

宮仕へは(公職務めというものは)、さるべき筋にて(それぞれの職責に於いて)、上も下も*思ひ及び(上級職も下級職も帝の御為と滅私奉公を自覚して)、出で立つこそ心高きことなれ(仕事に励むことこそ尊い心掛けです)。*公様にて(後宮への入内ではなく表向きの役所仕事として)、さる所のことを*つかさどり(所定の管理職務を果たし)、*まつりごとのおもぶきを*したため知らむことは(政務の趣意書を整理分類することは)、*はかばかしからず(女の本分に適うものではなく)、*あはつけきやうにおぼえたれど(遣り甲斐の無い様に思いましたが)、*などかまたさしもあらむ(何も見方によってはそう決め付けたもので無いのかも知れません)。*「思ひ及ぶ」は普通なら<考えつく。思い至る。>だが、此処では<職務を良く理解する>ような意味だろうか。しかし、そういう言い方では「心高きこと(見上げた心掛け)」に値するものとは思えないので、いっそ「滅私奉公」とまで言ってしまう。*「おほやげさま」は此処では<後宮の奥向きの事柄ではなく、公式の御所の表向きの事柄>を示すようだ。この部分もそうだが、全体に此処の文節は渋谷訳文および注釈ともに意味不明で、大筋としては与謝野訳文の大意に従う。*「司る」は一般には<公務を果たす>だろうが、尚侍としては総責任者として<管理する>のだろう。*「まつりごとのおもぶき」は<政務の趣意書>としたが、良く分からないので漠然とした言い方に逃げた。一般に内侍司(ないしのつかさ)は後宮十二司の一つとされ、天皇の私的な御用に仕える位置付けのようだが、男子禁制の後宮から出された天皇の伝令を内侍司の女官が御所表の高官に口頭または文書で知らせたと Wikipedia などに説明されていることからしても、蔵人や後世の側用人や茶坊主などのような実質で権限を体現してしまうという独特な地位に在ったようだ。だから「まつりごとのおもぶき」の中身は<天皇のご内意>のような気もするが、それにしても敬語もないし事務的な言い方に見えるので、やはり良く分からない。*「したたむ」は<整理する>。「知る」は此処では<見分ける→分類する>、かと思う。*「はかばかし」は<量(はか)が行く→物事があるべき様に進行する>ということのようで、その「物事のあるべきさま」とは此処では<女としての本領・本分>かと思う。*「あはつけし」は<淡いような→意味の薄いような→遣り甲斐の無いような>。*「などか」は下に打消し表現を伴って疑問・反語を強調する、と古語辞典にあり、多くは<なんで、どうして>と言い換えられるらしいが、此処では「しもあらん」に掛かるので<何も>が良さそうだ。で、その「さしもあらん」だが、これは<必ずしもそうでないかも知れない>くらいだろう。「また」はそのまま現代語でもあるが、此処では<更に>の意味では無いので、誤解を避ければ<または、他の見方をすれば、考えようによっては>などとも言えそうだ。この文の分かり難さは、尚侍就任が慶事であることは源氏殿も承知の上で、それが内定しているとまで打ち明けつつ、しかし大臣家としては妃として後宮入りするのではなく秘書として帝に仕えるということが口惜しいという、一理はあるが尚侍も事実上は妃と成り得る実情からして大いに社交辞令である言い方をしていること、かと思う。

ただ(偏に)、わが身のありさまからこそ(それ自体の状態によってこそ)、よろづのことはべめれと(万事が決まるものだ)、*思ひ弱りはべりしついでになむ(娘と思っていた者の入内が適わないことを、弱気にも受け入れつつあった所でしたが、)。齡のほどなど問ひ聞きはべれば(かの者に年齢の辻褃などを改めて詳しく聞き直しましたところ)、かの御尋ね*あべいことになむあり

けるを(藤原殿がかつてお探しなさっていた娘御に違いないということが分かりましたので)、*いかなべいことぞとも(どう致せば良いものかと)、申し*あきらめまほしうはべる(申し上げて決着を着けたく存じます)。*「思ひ弱る」は<気が弱くなる>と古語辞典にある。恐らくは、入内断念を納得する無念さ、なのだろう。いや、実感ではなく、あくまでも社交辞令として。*「あべい」は「あるべし」の音便。此处での「べし」は妥当性。*「いかなべい」は「いかならむべし(どうするべきだろう)」の音便。*「あきらむ」は<明らかにする、はっきりさせる>だろうが、此处では<実の親子の対面を実現する←決着を着ける>かと思う。

ついでなくては対面はべるべきにもはべらず(何かの機会が無いと御会い致すことも出来ないで居ります)。やがてかかることなむと(直ぐにこういうことなのだ)、あらはし申すべきやうを思ひめぐらして(説明申し上げようと考えまして)、消息申ししを(内大臣にお話がある旨のお手紙を差し上げましたが)、御悩みにことづけて(宮のご病気を理由に)、もの憂げに*すまひたまへりし(気が進まないのご辞退のお返事をなさいました)。*「すまふ」は<辞退する、断る>と大辞泉にある。現代語に繋がる語感が見つからない。

げに(確かに宮のご病気では)、折しも便なう思ひとまりはべるに(時期が悪いと思ひ中断しておりますが)、よろしうものせさせたまひければ(宮はお加減が宜しくていらっしゃるようですので)、なほ(やはり)、かう思ひおこせる*ついでにとなむ思ふたまふる(このように思い立ったからには内大臣に御会いしてご説明申し上げたいと存じます)。さやうに伝へものせさせたまへ(そのように宮からもお伝え下さいませ)」*「ついでに」には「対面はべらむ」が省略されているのだろう。

と*聞こえたまふ(とお話なさいます)。*この源氏殿の台詞は珍しいほど長文で、また帝を引き合いに出したり、社交辞令があったり、理屈っぽかったり、なだめすかしたりと珍しいほど計算高い。いや、源氏殿は元々計算高いが、それが言葉に表れるというのは可也の名場面かも知れない。実際、対の姫を藤原殿に引き合わせるの、源氏殿にとって、ということはこの物語に於いてだが、相当に重い意味がある事は間違い無い。

宮、「いかに、いかに、はべりけることにか(なんと、なんと、したことでしょうか)。かしこには(あの家では)、さまざまにかかる名のりする人を(いろいろとそのように自分は隠し子だと名乗ってくる人を)、厭ふことなく拾ひ集めらるめるに(素性の怪しいものまで、毛嫌いする事無く迎えて引き取ろうとしているようですのに)、いかなる心にて(その人はどういう考えで)、かくひき違へ*かこちきこえらるらむ(このように取り違えてあなたの娘だと名乗り立てしたのでしょう)。この年ごろ(その人は、この最近になって)、*うけたまはりて(何かの話を聞きつけ申して)、なりぬるにや(あなたの娘と名乗って六条院に住まうことに、なったのですか)」*「かこつ」は<何かに乗じてものを言う>であり、場合によっては<嘘を吐く>ともなって、非難の対象にもなりかねない。そして注には、この文について<主語は玉鬘。>としてある。従うが、大宮は「きこえらる」と丁寧語をその娘の言動に対して使っている。宮はその娘を藤原家の慶事として迎え入れたい高揚感に喜んでいて、親の取り違えという重大な過失を、些細な誤りとして済ます意向を示している、のだろう。源氏殿の計算通りだ。*「うけたまはる」は<話を聞く>の謙譲語だから、主語は対の姫だ。が、「なりぬるにや」が漠然とした言い方過ぎて、対の姫が<何を>聞きつけて<何に>なったのか分かり難く、「六条院に住まう」という補語は必要かとは思いますが、説得力のある裏付けは無い。

と、聞こえたまへば、

「さるやうはべることなり(それなりの経緯の有る事です)。詳しくさまは(詳しい事情は)、かの大臣もおのづから尋ね聞きたまうてむ(かの大臣もその内に調べてお分かりになるでしょう)。*くぐだき直人の仲らひに似たることにはべれば(取るに足らない町人の色恋沙汰に似たようなことですので)、明かさむにつけても(子細を明らかにすると云っても)、らうがはしう人言ひ伝へはべらむを(面白がって人が言い触らしかねませんので)、中将の朝臣にだに(息子の中将にさえ)、まだわきまへ知らせはべらず(まだ打ち明けておりません)。人にも漏らさせたまふまじ(他言無用に願います)」 *「くぐだきなほびとのなからひ」は注に<『集成』は「一人の女に二人が通じて、子供のことについて勘違いをしたといったこと」。『完訳』は「女の産んだ子を間違えるような、身分低い者の色恋に似た話。夕顔の一件をさすが、言明しない」と注す。>とある。「くぐだき」はくぐだらない、取るに足らない>で「仲らひ(色恋沙汰)」に掛かる。「直人(なほびと)」は<普通の身分の人>と古語辞典にあるが、宮に対して言葉を濁すとしたら<町人←商売女>くらいの語感かと思う。

と(と殿は宮に)、御口かためきこえたまふ(御口止めを申しなさいませう)。

[第四段 大宮、内大臣を招く]

内の大殿(うちのおほいどの)、かく三条の宮に太政大臣(おほきおとど)渡りおはしまいたるよし(お越しになつていらつしやる由)、聞きたまひて(お聞きになつて)、

「いかに寂しげにて(大宮は質素にお暮らしなので、どんなに手薄な状態で)、いつかき御さまを待ちうけきこえたまふらむ(太政大臣一行の仰々しい御出座しをお迎え申しなさったことだろう)。御前ども(ごぜんども、先導者たちを)もてはやし(労って)、御座(おまし、御一行の控え席を)ひきつくるふ人も(用意して世話する者も)、はかばかしうあらかし(手際良くは無いかも知れない)。中将は(普段なら宮家の者として世話役に回る源氏の中将も)、御供にこそものせられつらめ(殿の御供として来ていらつしやるだろうから)」

など(などと)、*おどろきたまうて(その従者による急な知らせに驚き慌てなさつて)、御子どもの君達(子息の貴公子たちや)、*睦ましうさるべき*まうち君たち(内大臣家に親しんでいる相応身分の高官たちを)、たてまつれたまふ(三条邸に差し向けなさいませう)。 *「おどろきたまうて」は従者による早馬などの知らせかと補語する。「由聞きたまひて」は風の噂である筈も無い。こういう当たり前のことのような手続き描写の省略は、当時の常識を知らない私にとっては可也の難物だ。 *「むつまし」は<親しい>だが、縁戚関係や主従関係で藤原左家の身内に当たる者、なのだろう。 *「まうちぎみ」は「まへつぎみ」の音便、とされる。「まへつぎみ」は「前つ君」で「公卿・廷臣」と表記され、古語辞典には<天皇の御前に伺候する上級貴族を尊敬して言う語>と説明されている。

「御くだもの(御菓子や)、御酒など(おんみきなど)、さりぬべく参らせよ(お客人に適宜にお進めしなさい)。みづからも参るべきを(私自身も参るべきだが)、かへりてももの騒がしきやうならむ(却って大袈裟になつてしまふだろう)」

などのたまふほどに(などと仰るところに)、大宮の御文あり。

「六条の大臣の訪らひに渡りたまへるを(六条の大臣が病氣見舞いにお見えになっていますが)、もの寂しげにはべれば(当方の準備が手薄で)、人目のいとほしうも(見た目も悪いし)、かたじけなうもあるを(接待が行き届かなくて、申し訳なくもあるので)、ことことう(取って付けたような)、かう聞こえたるやうにはあらで(この手紙で窮状を知ったようにでは無しに)、渡りたまひなむや(あなたもお越し下さいませんか)。対面に聞こえまほしげなることもあなり(あちら様もあなたに会ってお話したいことがあるようです)」

と聞こえたまへり(と書いていらっしやいました)。

「何ごとにかはあらむ(話とは、何のことだろう)。この姫君の御こと(二の姫のことに付いて)、中將の愁へにや(中將が結婚を訴えているのだろうか)」と思しまはすに(と思ひ廻らしなさっては)、「宮もかう御世残りなげにて(宮も老い先短かでいらして)、このことと切にのたまひ(二人の結婚を切望なさり)、大臣も憎からぬさまに(大臣も謙虚に)一言うち出で*恨みたまはむに(一言口に出して哀願なさるなら)、とかく申しかへさふことえあらかし(あれこれと反論申すことはとても出来ないだろう)。 *「恨む」は普通は<憎む、哀しむ、憤る>などだが、悲しい姿になることが多いからか、此处ではその<哀れさを見せる→惨めな姿で訴える→懇願する→哀願する>みたいなことらしい。藤原殿の劣等感の裏返しそのまま、という言い方だ。

*つれなくて思ひ入れぬを見るにはやすからず(中將が姫との引き離しを、平然と気にしていない様子を見る分には許せないが)、さるべきついでならば(良い機会があれば)、人の御言になびき顔にて許してむ(然るべき人の御意見に従うという事で二人の仲を許そう)」と思す(とお思いになります)。 *「つれなくて」については、注に<主語は夕霧。夕霧の態度。>とある。ある意味で、内大臣の素直さが表れた言い方だ。

「御心をさしあはせてのたまはむこと(これは大宮と源氏殿が二人の結婚に合意された上で私に話があると仰っていることだ)」と思ひ寄りたまふに(と藤原殿は考え付きなさって)、「いとど否びどころなからむが(ますます反対しにくい)、また(それだけに)、などかさしもあらむ(そう簡単に認めて良いものだろうか)」とやすらはるる(と逡巡なさる)、いとけしからぬ*御あやにく心なりかし(実に困った揉め事好きの御性分のです)。「されど、宮かくのたまひ(宮がこのような仰り)、大臣も対面すべく待ちおはするにや(大臣も私に会う心算でお待ちだとは)、かたがたにかたじけなし(それぞれに畏れ多い)。参りてこそは(伺った上で)、御けしきに従はめ(御意向に応じることにしよう)」 *「あやにく」は<不都合な、あいにくの>ということもあるとは思いますが、ここでは「けしからぬ」と既に<不都合で面倒で困る>ような修辭が付いているので、さらに曖昧な言い方の非難は効力が無い。ところで「あやにく」の語源は定説が無いとの事で、それなら「あや(文、綾、筋、理屈)」「にく(その傾向を強める、目立つ)」と考えて、敢えて<筋目を際立たせて事を荒立てる>ような語感としてみた。

など思ほしなりて(などとお思いになって)、御装束心ことにひきつくろひて(御装束を特に入念に着付けなさって)、御前なども(ごぜんなども、先触れなども少人数にして)ことことしきさまにはあらで渡りたまふ(簡素な編成の一行で三条邸に向かいなさいます)。

[第五段 内大臣、三条宮邸に参上]

君達いとあまた引きつれて入りたまふさま(貴公子たちをそれは大勢引き連れて三条邸にお入りなさる内大臣の御姿は)、ものものしう頼もしげなり(大掛かりで権力者然としています)。丈だちそぞろかにもものしたまふに(背丈が高くいらっしゃるところに)、太さもあひて(太り加減も相応で)、いと*宿徳に(とても貫禄があり)、面もち(表情も)、歩まひ(あゆまひ、歩き方も)、大臣といはむに足らひたまへり(余裕があつて、大臣と言うに十分でいらっしゃいました)。*「宿徳」は「しうとく」と読みがあり、注にはく。『集成』は「老成して威厳のあるさま」。『新大系』は「「しうとく」の音便形。徳を積んだ人、転じて貫禄のあるさま」と注す。>とある。背が高くて太っているのだから、いわゆる大男で、それが貴公子たちを引き連れて威厳を示せば、相当な貫禄だろう。

葡萄染の*御指貫(えびぞめのおんさしぬき、落ち着いた紫色の御袴に)、桜の下襲(桜色の飾り内着を)、いと長うは裾引きて(とても長く後ろに出して裾を引いて)、ゆるゆるとことさらびたる御もてなし(悠然と特に取り澄ました御姿勢で)、あなきらきらしと見えたまへるに(何とご立派なと見えなさるのに対して)、六条殿は、*桜の唐の綺の御直衣(桜色の光沢織りの略式上着に)、今様色の御衣ひき重ねて(紅梅色の着物を中に着合わせて)、しどけなき大君姿(くつろいだ王族姿で)、いよいよたとへむものなし(いよいよこの上無い優雅さで、)。光こそまさりたまへ(光り輝く麗しさこそ魅力的で格別でしたが)、かうしたたかにひきつくろひたまへる御ありさまに(これほどきちんと礼装を着付けなされた内大臣の御姿に)、なずらへても見えたまはざりけり(比べられないほど地味でいらっしゃいました)。*「指貫」は正礼装の表袴(うへのはかま、白ズボン)に比べて折柄の自由度の高い略礼袴で、これに「下襲(したがさね、燕尾の尻を2メートル以上もムダに長く伸ばした飾り布で、その実用上でムダに着飾ることが権威と文化の高さを誇る)」という取り合わせは束帯ではなく布袴(ほうこ)という準礼式らしい。それでも、「御装束心ことにひきつくろひて」とある内大臣の袍(ほう、上着)は二位らしく当色(たうじき)たる黒だったのだろう。*「さくらのからのきのおんなほし」が実際にどういうものかは私には良く分からないが、「桜色」は<ほんのり赤い白>のようで、「唐の綺」は<薄い平織地に織目を粗くして光沢を出した絹布を合わせた反物の上等品>くらいに思って、「直衣」は礼服ではないお洒落上着、などと考えて置く。同じ「桜の唐の綺の御直衣」姿が花宴巻の右大臣の花見の席での若き光君の服装として描写されていたが、その時は居並ぶ諸侯を圧してその「直衣」を束帯の「袍」代わりにして「葡萄染の下襲、裾いと長く引きて」いたという「あざれたる大君姿」だったというから、改めて当時の光君の生意気な態度とそれが許されるスター性を故右大臣の気分で苦々しく振り返る。が、その光君も今や名実共に押しも压されもせぬ太政大臣とあってみれば、この「しどけなき大君姿」も随分と落ち着いた印象に見える。また「いまやういろ」は<濃い紅梅色>らしいが、下襲を着けていない御衣(おんぞ、御着物)姿のようで、いっそう平服然として力が抜けている。などと少しは分かったような事を言っただけは見たものの実のところ私は、この両者の対比は「風俗博物館」のWebサイトにある「貴族の生活～装束(男性)」のページの写真と説明で辛うじて少し感触を掴んだに過ぎない次第だ。

君達次々に(貴公子たちが内大臣の後に続いて次々に)、いとものきよげなる御仲らひにて(とても華やかな御親族一行で)、集ひたまへり(参列なさいます)。藤大納言(とうだいなごん、大納言や)、春宮大夫など(とうぐうのだいぶ、東宮坊長官などと)、今は聞こゆる(今は出世した宮とは別腹の大臣の弟たちの)子どもも(子供たちも)、皆なり出でつつものしたまふ(皆成人して出席なさいます)。おのづから(彼らは皆当然にも)、わざともなきに(取り立てて言うまでもなく)、おぼえ高くやむごとなき殿上人(帝の信認高く上流貴族で)、蔵人頭(くらひとのとう、帝側近の

総管理者)、五位の蔵人(ごみのくらうど、側近次席管理者)、近衛の中(このゑのちゅう、帝護衛の次席官)、少将(せうしょう、次席官補佐)、弁官など(べんくわんなど、政務事務官など)、人柄はなやかにあるべかしき(人材豊富というように)、十余人集ひたまへれば(十人余りが集まったので)、いかめしう(威厳があり)、次々のただ人も多くて(それぞれの従者も多くて)、*土器あまたたび流れ(御酒の盃が何度も回され)、皆酔ひになりて(皆酔ってしまって)、おのおのかう*幸ひ人にすぐれたまへる御ありさまを物語にしけり(口々にこのように出世者が多くていらっしゃる一族の御繁栄ぶりを話題にしていました)。 *「かはらけあまたたび」については、注に『完訳』は「上座から同じ盃を三度廻らすのが常。それ以上に廻る盛んさ」と注す。>とある。 *「さいはいびとにすぐる」は<他家を圧して成功者を多く輩出している→出世者が多い>という意味で、それを受けて「御ありさま」が<一族の御繁栄ぶり>になるかと思う。

[第六段 源氏、内大臣と対面]

大臣も(当の内大臣も)、めづらしき御対面に(久しぶりの源氏殿との御対面に)、昔のこと思し出でられて(昔のことが思い出されて)、よそよそにてこそ(人伝に噂を聞くような余所余所しさであってこそ)、はかなきことにつけて(些細な事で)、挑ましき御心も添ふべかめれ(張り合いがちな御心も起きてしまうようだが)、さし向かひきこえたまひては(こうして直接御会いなさると)、かたみにいとあはれなることの数々思し出でつつ(互いにとても深く心に残る事柄の数々が思い出されて)、例の(以前のように)、隔てなく(親しく)、昔今のことども(昔のことから今のことまで)、年ごろの御物語に(長年にわたる話題の御話に)、日暮れゆく(日が暮れ行きます)。御土器など勧め参りたまふ(御酌し合って御酒なども進みなさいます)。

「さぶらはでは悪しかりぬべかりけるを(駆け付け申さねばいけなかったのかも知れませんが)、召しなきに憚りて(お呼びが無いので遠慮しております)。うけたまはり過ぐしてましかば(お知らせいただくずに参りませんでしたら)、*御勘事や添はまし(御叱りを受ける所でした)」 *「御勘事」は「おほんかうじ」と読みがある。古語辞典には「かうじ」は「かんじ」の音便とある。「かんじ」は「勘当(かんだう)」のこととある。「勘当」は<犯した罪の重さを法に照らして計ること>らしい。「勘ふ(かながふ)」は「考ふ」と同じように<物事の性質を理解して行動予定を立てること>ではありそうだが、「考ふ」が事態全体を予測して予算立てをするのに対して、「勘ふ」は現状が予定された計画に適合しているかどうかを検証する決算締めをするような印象だ。「勘定」という語もあるように、「勘」は<鋭い感性>というよりは<事前の認識>であり、その予定値にたいして事象の誤差を<計算する>ようなことではないだろうか。どこか「癩に障る」の「癩」にも通じる気がする。だから、「勘当・勘事」は<合意した筈の契約内容と話が違う>という認識の上に、その違いを非難する・正す・叱る、といったことかと思う。

と申したまふに(と申しなさると源大臣は)、

「勘当は(叱られるのは)、こなたざまになむ(私のほうです)。勘事と思ふこと多くはべる(こちらにはあなたにとって順当な話では無いと思えることが多く御座います)」

など、けしきばみたまふに(打明け話の素振りをなさるので)、このことにやと思せば(藤大臣は姫と中将の件かと御思いになって)、わづらはしうて(どういう態度で話を切り出しなさるのか

と気懸かりになり)、かしこまりたるさまにてものしたまふ(改めて固い表情で畏まった姿勢に身構えなさいます)。

「昔より、公私の(おほやけわたくしの)ことにつけて、心の隔てなく(隠し事なく)、大小のこと聞こえうけたまはり(大小に至る何事にもお話申しお聞きして)、羽翼を並ぶるやうにて(左右の翼を並べるように貴殿と力を合わせて)、朝廷の御後見をも(おほやけのおんうしろみをも、帝の御政務の補佐を)仕うまつるとなむ思うたまへしを(将来は仕えてまいるものと存じておりましたが)、末の世となりて(晩年の今となって)、そのかみ思うたまへし本意なきやうなること(その昔に考えていた本意に背くような反目しあうことが事が)、うち交りはべれど(在ったりもしますが)、うちうちの*私事にこそは(それらは親しさゆえの瑣末な行き違いで、)。おほかたの心ざしは(基本的な考えは)、さらに移ろふことなくなむ(昔と少しも変わってはいません)。 *「わたくしごととこそは」については、注に<下に「はべれ」などの語句が省略。>とある。更に言えば、此処の文は「うち交りはべれど」という逆接条件文の補足で、省略句は「はべれば」となって、下文の「おほかたの(およその、基本的な)」という結論に繋がるので、此処に句点で文落させるのは奇怪しい。ところで、そうすると「わたくしごと」とは何か。太政大臣と内大臣は正に公人である。そして縁戚関係にある身内である。だから、この二人の間では<公の付き合いだけではない>「うちうちのわたくしごと(身内の事柄)」が有り得る。いやしかし、誰でも社会人である以上は公的な側面を有し、同時に誰にでも「うちうちのわたくしごと(家庭の事情)」はそれなりにあるので、むしろ此処の「こそ」の言い方は最高位の公人同士だからこそ目立ってしまう<却って日頃の付き合いがある親しさだからこそ起こる些細な行き違い>を示しているようにこそ見える。

何ともなくて積もりはべる(それと気付かずに重ねてしまう)年齢に添へて(としよはひにそへて、年かさに伴って)、いにしへのことなむ恋しかりけるを(昔のことが懐かしく思い出されますが)、対面賜はることもいとまれにのみはべれば(御会い頂ける事もごく稀にだけですので)、*こと限りありて(実務総責任者たる内大臣の身分柄決まりが在って)、世だけき御ふるまひとは思うたまへながら(威厳を持ったお振る舞いを為さるとは存じますが)、親しきほどには(私との親しい間柄では)、その御勢ひをも(その大編成の御一行も)、引きしじめたまひてこそは(引き鎮めて少人数の御編成で)、訪らひものしたまはめとなむ(お訪ね下されば良いのにとのように)、*恨めしき折々はべる(お誘いのお断りを残念に思うことなどが御座います) *「こと限りありて」は注に<『集成』は「ご身分柄、きまりがあつて、威儀を張ったお振舞をなさらねばならぬことと存じますが。軽々しく私などにお会い下さらぬのも無理はないが、の意」と注す。>とある。 *「恨めしき折々」は注に<『完訳』は「腰結役を断られた折など」と注す。>とある。

と聞こえたまへば(と応じ申しなさると)、

「いにしへは(昔は)、げに面馴れて(確かに良く会って)、あやしく*たいだいしきまで馴れさぶらひ(まことに身分違いをわきまえもせず親しくお近付き致し)、心に隔つることなく御覧ぜられしを(心に分け隔てなく御会いいただきましたが)、朝廷に仕うまつりし際は(帝に御仕え始めた時は)、羽翼を並べたる数にも思ひはべらで(あなた様と並んで帝を御支え致す高官の数に自分が入るなどとは存じませんで)、うれしき御かへりみをこそ(あなた様の嬉しいお引き立てこそを)、はかばかしからぬ身にて(能の無い私のような分際で)、かかる位に及びはべりて(こうした地位にまで上り詰めまして)、朝廷に仕うまつりはべることに添へても(帝に御仕え致しますこと

につけても)、思うたまへ知らぬにははべらぬを(お思い申し忘れては居りませんが)、齡の積もりには(歳を取りますと)、げにおのづから*うちゆるぶことのみなむ(確かにどうしても気が緩んでしまうことばかりが)、多くはべりける(多くなります)」 *「たいだいし」は「怠怠し」とあり<怠慢である、軽率である>と古語辞典にある。「あやし」は<常に無く>だが、「怠怠し」という否定評価に掛かるので<非常に怠慢>よりは<実に軽率>という言い方だろう。「軽率」は<思慮が足りない>で、何に対して思慮が足りないかと言えば、王家筋の源氏に対して臣下筋の藤原氏という身分の違いに対してなのだろう。 *「うちゆるぶこと」は注に<『完訳』は「腰結役を断ったのを詫びる」と注す。>とある。

などかしこまり申したまふ(などと内大臣は恐縮して申し上げます)。

*そのついでに(その内大臣の受身に転じた姿勢に乗じて)、ほのめかし出でたまひてけり(源大臣は対の姫の出自などの事情を藤大臣にざっとお話なさったのです)。 *「そのついで」は注に<『完訳』は「内大臣の恐縮する隙を逃さず、源氏は玉鬘の真相を漏す」と注す。>とある。確かに、「かしこまりたるさまにてもものしたまふ」かたくなな態度の相手には、符とした弾みで話を跳ね返されかねない。「うちゆるぶことのみなむ」と弱みを見せた相手になら攻め易い。だから、謙虚な姿勢を見せて受身に転じた相手の一寸した隙に付け込む源氏殿の抜き無さが際立つ描写で、結構重要な一文かと思うが、非常に簡素だ。

大臣(内大臣は)、「いとあはれに(何と感慨深く)、めづらかなることにもはべるかな(喜ばしいことでしょうか)」と、まづうち泣きたまひて(先ず泣き出しなさって)、

「そのかみより(その娘については、行方不明に成った当初から)、いかになりにけむと尋ね思うたまへしさまは(どうなってしまったのだろうと探してありました事は)、*何のついでにかはべりけむ(何かの序ででしたでしょうか)、愁へに堪へず(心配の余り)、漏らし*聞こしめさせし心地なむしはべる(少しお話申し上げたような気がいたします)。 *「何のついで」は注に<「帚木」巻の雨夜の品定め折をさす。>とある。 *「聞こしめさせし」は注に<『完訳』は「あなたも記憶のはず、の気持。とはいえ、だから間違えるはずもない、と迫る余裕はない」と注す。>とある。気になる指摘だ。内大臣が源大臣の対の姫についての打明け話をどう聞いたのかは非常に興味深い。また、その前に源大臣が藤大臣にどういう言い方で説明したのかは興味深い。が、「ほのめかし出でたまひてけり」という簡素な描写だ。特に、夕顔とは常夏だが、と光君自身との関係をどう話したのか。何処まで知らないことにしたのか、非常に興味深い。ただ、藤大臣は対の姫が、行方をくらました常夏との間の女兒、とはかつての撫子だということを知った。そして思わず泣いたのだ。という描写からすると、その娘が源大臣の庇護の下で六条院に暮らしているという奇遇を、今の此処の段階では、内大臣は素直に奇遇と受け止めた、ように見える。まだこの段階では、藤大臣は事の仔細を理解できる状態ではなかっただろう。だから、この文は取り敢えず内大臣が自分自身の事情確認のために、当時の背景を説明する心算で源大臣に話していると思う。だから私は「あなたも記憶のはず、の気持。」とか「迫る余裕はない」とかの相手に対する疑問や確認を意図した印象の文では無い、と読んで置く。

今かく(今はこうして)、すこし人数にもなりはべるにつけて(少しは一人前にもなりましたので)、はかばかしからぬ者どもの(出来の良くない者どもが)、かたがたにつけてさまよひはべるを(それなりの縁故に乗じて隠し子と名乗って頼り無さげにして居りますのを)、かたくなしく(教養が無く)、見苦しと見はべるにつけても(見苦しいと思いますにつけても)、またさるさまにて(またそれはそれとして)、数々に連ねては(子供として面倒を見ていますが)、あはれに思うた

まへらるる折に添へても(そうした落し種が不憫に思われます時などは)、まづなむ思ひたまへ出でらるる(先ずその娘が思い出されるのです)」

とのたまふついでに(と仰りながら)、かのいにしへの雨夜の物語に(お二人はかの遠い日の雨夜の物語に)、いろいろなりし御睦言の定めを思し出でて(いろいろとあった御体験の結論話を思い出しなさって)、泣きみ笑ひみ(泣いて笑って)、*皆うち乱れたまひぬ(すっかり打ち解けなさいました)。 *「みな」は<(思いの)全て残らず>で<すっかり>。だが、源氏殿が全てを打明けたとは到底思えない。また、内大臣が本当に心を開いたとも思えない。この場の和やかな雰囲気 of 修辞だろう。

[第七段 源氏、内大臣、三条宮邸を辞去]

夜いたう更けて(夜がたいそう更けてから)、おのおのあかれたまふ(それぞれ別れてお帰りになります)。

「かく参り来あひては(このように普通った三条邸に参り来てあなたに御会いしますと)、さらに(改めて)、久しくなりぬる世の古事(遠い日のことに成った若い日の事が)、思うたまへ出でられ(思い出されて)、恋しきことの忍びがたきに(懐かしさが隠し切れずに)、立ち出でむ心地もしはべらず(立ち去る気が致しません)」

とて、をさをさ心弱くおはしまさぬ六条殿も(めったに気弱にお成りでない源氏殿も)、酔ひ泣きにや(酔いに涙を誘われたのか)、うちしほれたまふ(しみりお泣きになります)。

宮はたまいて(宮といえば増して)、*姫君の御ことを思し出づるに(早世した源氏殿の正妻であった娘御のことを思い出しては)、ありしにまさる御ありさま(夫婦であった時に勝る源氏殿の優雅なお姿や)、勢ひを見たてまつりたまふに(威厳ある立派さを拝し申し上げると)、飽かず悲しくて(それに並び立ったであろう娘を失ったことが惜しまれてならず悲しくて)、とどめがたく(止め処なく)、しほしほと泣きたまふ*尼衣は(しな垂れてお泣きになる尼衣姿は)、げに心ことなりけり(実に思いの深さが格別でした)。 *「姫君」は注に<故葵の上のことをさす。>とある。 *「あまごろも」は注に<「泣きたまふ」は「尼衣は」を修飾する一続きの文。『完訳』は「「尼衣」と「海人衣」の掛詞。濡れるほどに泣く意。諧謔味ある表現で、大宮の格別な感激をいう」と注す。>とある。「諧謔味(かいぎやくみ)」とは<しゃれっ気>らしいが、宮が娘の死を悼む姿を洒落っ気で印象付けようと言うのは歌人の発想だろうか。だとしたら、どこか芸人根性を思わせる作者の性だ。

かかるついでなれど(こうして宮を前にした義理の兄弟としての面会の機会でしたが源氏殿は藤原殿に)、中将の御ことをば(息子の中将と二の姫との御結婚話については)、うち出でたまはずなりぬ(言い出しなさらず終いでした)。ひとふし用意なしと思しおきてければ(源氏殿は藤原殿がこの親しい縁戚関係にも関わらず、今少し寛容な思い遣りが足りないとお考えになっていた)、口入れむことも*人悪く思しとどめ(許しを乞う様に自分が口を挟むことも変に下手に出るようでお思い止まり)、かの大臣はた(その藤原殿はまた)、人の御けしきなきに(源氏殿が許しを請う素振りをお見せにならないので)、さし過ぐしがたくて(その話題を自分から持ち出すのは出過ぎたようで言い出し難くて)、さすがに*むすぼほれたる心地したまうけり(やはりわだかまりの解けない気分にお成りでした)。 *「ひとわろし」は<体裁が悪い、みっともない>の他に<人から良く

ないと見くびられる状態をいう>と古語辞典にある。ざっと<変に下に見られる>ような感じだろうか。*「むすぼほる」は「結ぼる」に同じとあり<縁を結ぶ>という意味もあるが、結び目が固くなって<解けない、問題が残る、気が晴れない>という意味にもなる、と古語辞典にある。

「今宵も御供にさぶらふべきを(今宵も御供して六条院まで御送りすべきでしょうが)、うちつけに騒がしくもやとてなむ(急に大行列になって騒がしくなってもと、ご遠慮いたします)。今日のかしこまりは(今日の御礼のご挨拶は)、ことさらになむ参るべくはべる(改めて申し上げたいと存じます)」

と申したまへば(と内大臣が申しなさると)、

「さらば(それでしたら)、この御悩みもよろしう見えたまふを(宮のお加減も御宜しそうですから)、かならず聞こえし日違へさせたまはず(必ずお知らせ申し上げた姫君の裳着の日取りをお間違えなく)、渡りたまふべき(お越し下さいますように)」よし(とのこと)、聞こえ契りたまふ(源氏殿は申し上げお約束なさいます)。

御けしきどもようて(御二方は御機嫌が良くて)、おのおの出でたまふ響き(それぞれお帰りになる御一行の物音は)、いといかめし(たいへん大掛かりでした)。

君達の御供の人びと(内大臣の弟や子息たちといった貴公子たちの供人たちは)、

「何ごとありつるならむ(どういうお話だったのだろう)。めづらしき御対面に(珍しい御対面に)、いと御けしきよげなりつるは(とても殿の御機嫌がよさそうになったのは)」

「また、いかなる*御譲りあるべきにか(また何か御譲位でもあるのだろうか)」 *「おんゆづり」は注に<かつて源氏が内大臣の地位を譲ったことなどをさす(「少女」巻)。>とある。

など、ひが心を得つつ(勘違いをして)、かかる筋とは思ひ寄らざりけり(こうした内容の話とは思い寄らなかったのです)。